

高齢者・障がい者等を対象にした森林教室開催への取組について

(中間報告)

津軽白神森林生態系保全センター 久保 翔太郎

1. はじめに



(図1) 一般公募の森林教室の様子

私は事業の一環として行われる森林教室に携わる機会が年に数回ある。多くの方々と直接お話をすることにより、今まで気がつかなかった事を考えるきっかけや仕事のやりがいを感じ、参加者の方々にお伝えする事より、参加者の方に教えていただいた事の方が格段に多かった。その中で次第に感じるようになった2つのことがある。

1つは、一般公募の森林教室では参加者の年齢層からみると、高齢者層で特に森林を求める度合いが強いことで

ある。(図1)

高齢の参加者との会話のなかで、「どんなに科学が進歩して世の中が便利になったとしても、最終的に人が求めるものは間違いなく自然環境だ」という言葉が強く印象に残っている。森林教室終了後のアンケートでも同じような思いを書かれている方が多かった。

そのため、高齢者施設などに入居されていて森林にふれる機会が少ない方々にも、森林浴を提供することができないかと考えるようになった。



(図2) 小学校での出前森林教室の様子

2つめは、若い世代では「森林は素晴らしい」という知識だけが先行していて、本当に森林の素晴らしさを体験したことがある人はほとんどいないということである。小学校からの依頼を受け森林教室を開催した際、児童に地元の魅力を聞いたところ「白神山地」「森林」という言葉がでたものの、実際に森林に入った事があるという児童は23名中2名のみだった。(図2)

この2つから、森林を室内に再現し「疑似体験型森林教室」を行えないかと考えた。それにより歩行が難しい高齢者や障がいを抱えた方に対しては無理なく森林の魅力や

癒やしを提供でき、若い世代の方々には森林に興味を持ちみずからの意思で森林に足を運ぶきっかけを作ることができるのではないかと考え、プログラム作りを始める事とした。

現在はプログラムの作成、試行を行っている段階であり、ここでは現段階までの取組を紹介する。

2. 実施に向けての活動

具体的に活動するにあたり森林管理署の先輩へ相談をしたところ、企画に賛同していただきともに活動することとなった。最終的に東北森林管理局管内の若手職員7名で活動を行うこととなり「白神山地を持ってく会」と名付け、業務時間外や休日に活動している。



(図3)

月に1回程度開催している作戦会議のなかで「ボランティア登録をすれば高齢者・障がい者施設で活動できる」と意見が出され、まずは高齢者、障がい者を対象として活動し、その後若い世代を含めた広い世代を対象に活動を進めていくこととした。

(1) 需要の把握

作戦会議で森林を再現する方法について検討し、実現性が見えてきたところで需要の把握を行った。

高齢者・障がい者向けの需要の把握は、鱒ヶ沢町社会福祉協議会で行った。企画を説明したところ、今までにない取組で利用者の需要は高いとのことだった。また、平成28年度から各施設での実施ができるよう準備をすること、職員向けの試行を実施することなど、協議会側からの要望もあり、今後協力体制をとっていただくこととなった。

広い世代向けの需要の把握は、白神山地に関連したイベント等を開催しているNPO法人で行った。その結果、この活動は一般の方と森林との関わりを作っていくために今後さらに重要になるとのことだった。そのことから需要はあると判断した。「森林と人の仲介」という活動理念は同NPO法人も同じであり、今後様々な場面で積極的に協力したいとのことをお言葉をいただき、こちらも協力体制をとっていただくこととなった。(図3)

(2) 試行

需要が見込めたこと、具体的な実施の目途がたったことから、一般の方々を対象に試行を行い意見を伺った。

① 試行準備

五感をフルに使った森林教室にするため、それぞれの感覚で森林が伝わるよう準備した。



壁紙設置完了(視覚)
(図4)

ア. 森林の写真をA0判用紙9枚分の大きさに拡大し、貼り合わせて大きな壁紙を作成した。それを壁4面に貼り付け、森林を再現した。より臨場感を出す工夫として歩道の地際から撮影した写真を使用し、奥に歩道が続いているように感じられるようにした。(視覚での再現)(図4)



床に撒く
(視覚・触覚・聴覚・嗅覚)
(図5)

イ. 床にシートを敷き、広葉樹の落ち葉を敷き詰めた。落ち葉を踏みしめた時の音や手にとったときの触り、香りがわかるようにした。
(聴覚・触覚・視覚・嗅覚での再現)(図5)



フナ、クロモジの煮汁
(図6)

ウ. 疑似体験空間の香りについては、当初アロマオイルを使用する予定であったが、より森林の香りに近づけるため、ブナとクロモジを煮詰めた煮汁を水で割り、加湿器で再現空間へ放出した(嗅覚での再現)(図6)

エ. 森林内の映像を流すためプロジェクターとスクリーンを設置した。

対象者が疑似体験空間に入る前の準備はここまでで、そのほかの五感を使った再現の工夫については対象者が再現空間の中に入り、プログラムを進めていく中で以下の通り取り入れた。

②初試行

試行には自営業、会社員、公務員の、男性4名、女性1名 計5名の方に参加していただいた。疑似体験型森林教室は以下の順序で行った。



散策マップでルート説明
(図7)

ア. 十二湖の散策マップで疑似体験するルートの説明を行う。(図7)

イ. 事前のルート説明の順序で映像を流す。このとき、目線の高さの映像を流すことにより室内と映像の地面が続いているよう工夫した。(視覚での再現)

また、時折地際に生えている植物等の説明をはさみ、森林を少しでも広い視野で見ただけできるよう工夫した。(図8)



(図 8)

ウ. 映像中にブナやクロモジが映った際に実物を手にしてもらい、質感や香りがわかるよう工夫した。(触覚・嗅覚での再現)(図 9)

クロモジは27年秋に採取したものを使用した。通常は香りが抜けてしまうため香りが抜けない保存方法についてメンバーに相談し、短く切ったものを水で浸し、冷凍保存することにより香りが充分に残るよう工夫した。



(図 9)

エ. クロモジ茶を飲んでいただき、効能等の説明を行った。(嗅覚・味覚での再現)

3. 成果

試行の結果、高齢者向けに行えば絶対に喜んでもらえるのではないかと、カフェ風になれば若者、特に女性の需要が高まるのではないかと意見をいただいた。また、「実際に森林を歩きたくなってきた」「もっと別の木の香りも嗅いでみたい」という感想もあった。実施前と比べ参加者の森林への興味が格段に上がっていると感じ、参加者の反応も非常に良かった。

他にも様々な意見や改善すべき点を上げていただいた。これを踏まえ改良を行っていき、完成度を高めていきたい。

4. 今後の展望

(1) 28年度から高齢者・障がい者の方々へ自然体験をしてもらえるよう準備を進める。その前段として社会福祉協議会の職員向けに試行を行い、意見を伺いながら対象者により楽しんでもらえるための工夫を検討する。

(2) 木材利用推進をはかるためのプログラムを追加する。特に若い世代向けに、森林に興味を持ってもらうとともに、森林の保全と活用の両面で正しい理解をしていただけるよう取り組みたい。具体的には林業技師の方に協力を依頼し小型目線カメラで伐倒の様子を撮影したり、伐採からその木が使用されるまでのルートを追いながら、木材利用について説明をしていくようなものを作りたいと考えている。

(3) NPO法人との連携を強化し、多くの場所で多くの方に疑似体験をしていただけるよう活動をしていく。また、疑似体験だけではなく、その後みずから森林へ足を運んでいただけるようなプログラムとなるよう模索していきたい。

(4) この取組が新たな森林環境教育の手法として「白神山地を持ってく会」以外の団体や組織で使われ、それぞれの地域の森林を再現したものが作られるようになればと考えている。

5. 最後に

現在の技術であれば、お金をかければ今回の疑似体験型森林教室より質の高いバーチャル体験ができる。しかし、高齢者・障がい者にとってはその機材を身につける段階で抵抗感や緊張感が生まれるのではないかと考えている。若い世代の場合は、質の高い体験をしたことにより本当に森林に行った感覚に浸ってしまい、本物の森林から人を遠ざけてしまう逆効果をうむ可能性もある。あくまでも身近にあるもので手軽に作り、高齢者・障がい者の方々には少しでも森林を思い出したり、体験できるものとして、若い世代にとっては「実際に森林に行ってみようかな」と感じられる原始的なバーチャル体験として普及させていきたい。